

＜研究の周辺 I＞

非常勤講師を経験して

藤本晴久

いま、とある大学で非常勤講師をしている。その大学で講義していたとき、泣きたくなるようなシーンに直面した。私が担当しているのは英語の外書講読で、政治・経済・社会に関する諸々のトピックを題材にして教えている。だから、そのなかでの事柄なのだが、多くの学生が英文法の基礎ともいべき五文型を知らない。したがって、当然、英文を読めないし理解することもできない。授業中に英単語を辞書で引き、その単語を連想して組み合わせ、なんとなく通じる日本語に変換するというのが実情である。

だが、本当に泣きたくなるのは、学生が英文法をしらないこと、英文を読めないこと、時事問題を知らないこと、理解していないことではない。彼らが決まって大学生活や講義に期待も楽しみも抱かないまま、学生生活を送っているのを知ったときだ。その瞬間、僕は居たたまれなくなり、悲しい気持ちになった。大学とは、学生に「社会」を教える場であり、その素材を提供する場である。いまでも、大学とはそういうものだ、と思っている。誰でも入学当初は、何らかの希望をもって入学し、それなりに努力する。ならば、当然、希望もなく時間だけを浪費するのは彼らの責任ではなく、大学がその義務を怠った結果で

はなかろうか。学生生活を有意義にするかどうかは、学生自身の責任であると同時に、大学側の義務でもある。少なくともこのレベルの範囲において、いまの大学は本当にその責務を果たしているのだろうか。大学にくる学生は、まがりなりにも受験勉強を潜り抜けてきたのであり、能力がないとは思わない。だから、その彼らが希望や楽しみをもちえない、またその能力を引き出せないのは、間違いなく大学の責任なのである。そういう学生の実態を無視して難解な講義カリキュラムを設定する大学とは何なんだと思ってしまう。

水のでない水道施設を税金でまかなうことを許すことはできないだろう。しかし、水の出ないはずの水道施設と同じはずの、高い授業料を受け取りながら学生に考える素材すらまともに提供できない、大学生活の4年間を学生の自己責任だと履き違えた大学とは、一体、何であろうか。いま、世間では「ニート」問題が社会問題化している。私が接している彼らは、「教育を受けている」という点で区別されるが、果たして実態は異なるものだろうか。また、就学人口が減少する中で、生き残りをかけた大学間競争が激化し、どの大学も多様なカリキュラムを用意している。だが、果たしてそれは彼らの実態や要求に即したものとなっているのか。だから今、私は学生たちに提案している。自分の役に立つ、楽しみを感じることを学ぼうと。そういう意味で、あと半年、私も学生も正念場である。

(京都大学大学院経済学研究科)

研究活動報告 I

大学院ゼミナール

【地域産業分析】

2004年度後期

中村剛治郎『地域政治経済学』有斐閣、2004年の講読

2005年度前期

研究報告

【国際農業分析】

2004年度前期

F.マグドフラ編・中野一新監訳『利潤への渴望』大月書店、2004年の講読

【経済学古典研究】

2004年度前期

K.マルクス『資本論』第1巻の講読